

# ■「合わせた指導」<sup>\*)</sup>の基本的な考え方

\*)「各教科等を合わせた指導」のこと。

- ◆ 平成元年の養護学校学習指導要領の解説書に、以下の記述があります。  
『精神発達の未分化な児童・生徒に対しては、総合的な学習が適合しやすいため、実際の指導を計画し、展開する段階では、**指導内容を教科別又は領域別に分けない指導**、すなわち、領域・教科を合わせた指導の形態が大切にされる。』

上記は、「合わせた指導」について考える上で重要な記述です。また、知的障害の児童・生徒の教育においては、教科や領域ごとに分化した抽象的な内容の指導よりも、実際の場面における具体的な内容の指導が効果的であることも踏まえ、以下に基本的な考え方を示します。



## 「分けない指導である」ということ

知的障害のある児童・生徒は、知的発達の状態が未分化な段階にあるために総合的な学習が適合しやすいのであり、その点において「**合わせた指導**」とは、**実際には「分けない指導**」であると理解することが重要です。

## 「生活中心の総合的な学習活動である」ということ

「合わせた指導」は **生活中心の総合的な学習活動** である、と捉えることが重要です。生活上の課題を達成するための**一連の活動に取り組む過程で**、いろいろな領域や教科の内容を習得するものです。

\* 「総合的な学習の時間」は、**各教科等で身に付けた知識や技能を相互に関連付け**、学習や生活において生かし、それが総合的に働くようにする学習であることに留意する必要があります。

## 「寄せ集めた指導ではない」ということ

「合わせた指導」とは、各教科の内容を教え授けるための指導の形態ではありません。したがって、「合わせた指導」を文字通りに受け止めて、「**各教科の内容を寄せ集めた指導**」に陥ることがないようにすることが大切です。

- ◆ 平成11年の養護学校学習指導要領解説では、『一般に知的発達の状態が未分化であれば、総合的な活動、すなわち領域・教科を合わせた指導の必要性が高くなり、他方、知的機能の分化の程度が高くなるにしたがって、各教科別に指導できることになる。』

## ■ 授業づくりのキーワード

授業づくりのキーワードは「**できる**」です。

- ◆ 「できる」を見る(把握する)。
- ◆ 「できる」を大切に活動を設定する。
- ◆ 「できる」を生かした指導の手だてを工夫する。
- ◆ 「できる」状況をつくる。



「**できた!**」をほめる。



- ◆ 「できた!」は、「**自信**」を育みます。
- ◆ ほめられることは、「**喜び**」につながります。
- ◆ 自信と喜びは、次への「**意欲**」を引き出します。

■ 「合わせた指導」の授業づくりは、できないことをできるようにするという発想ではなく、児童・生徒一人一人の「今できること」に目を向け、**児童・生徒の活動意欲や自己肯定感を高めることのできる授業づくりを工夫する**姿勢が大切です。



★ 「できる」を生かすとは、安易な指導目標の設定や、「現状に止まる指導でよい」といった発想を促すものではありません。

### 授業づくりに当たって

- ◆ 大切なことは、「**子供主体**」ということです。
  - 「**できる**」状況をつくり=成功体験を豊富にし、
  - 「**できた**」という満足感や達成感を味わうことを通して、
  - 「**生き生きと**」活動に取り組む意欲や姿勢を育てる。

\* 児童・生徒は、その結果として、生活に必要な知識・技能を身に付けていきます。

## ■「子供の見方」(教員の基本姿勢)



「合わせた指導」に当たっては、

- ◆ 「～できない」「～することが難しい」といった子供の見方(実態把握)ではなく、「～できる」、「(～すれば)できる」を見る(観察・把握する)姿勢を大切にしましょう。
- ◆ 「どのような状況であればできるのか」を把握します。

常に「子供の味方」であるように

### 学習指導案の作成に当たって

#### ◆「児童・生徒の実態」

- 本単元や本時に関することに焦点化して、児童・生徒一人一人の「～できる」を大切に観察・把握した実態を記述します。
- 「～できない」といった記述ではなく、「～であればできる」、「～すれば～できる」と記述できるところまで、児童・生徒の「できるを見る」姿勢が大切です。「～できない」といった記述を極力無くすよう心がけましょう。

例) 集団での活動場面では、一定時間集中して学習することが苦手であるが、A児自身が注目され自信を持って取り組めるような環境づくりや、環境のノイズの除去に配慮すれば、意欲的に学習に参加することができる。

下線部が大事!



#### ◆「本時の活動」

- 実態把握で得た「できる(こと)」を大切に、児童・生徒一人一人が十分に活躍できる学習活動を設定し、記述します。

例) パーティーの招待状づくり  
児童・生徒一人一人が力を発揮できるように、平仮名を書く児童、なぞり書きをする児童、飾り付けをする児童などの役割分担を行い、みんなで協力して一枚の招待状を作成する。



#### ◆「本時の目標」

- 学習活動を通じて、児童・生徒一人一人に「どのような姿を期待するのか」、「どのような力をつけてほしいのか」を具体的に記述します。

#### ◆「指導の手だて」

- 期待する姿を引き出すために、児童・生徒一人一人が「今できること」を生かして指導の手だてを工夫します。



## ■ 授業づくりのポイント

### どの児童・生徒もできる状況をつくる

どの児童・生徒も精一杯の力を発揮できる状況をつくる。  
どの児童・生徒もうまく課題を成し遂げられる状況をつくる。

#### ■ できる活動の選択

- ・ 一人一人ができる活動、より良く取り組める活動、適切な指導の手だてがあれば取り組むことができる活動などを選択します。
- ・ 既習・既得の活動で学習(単元)を構成することにも留意します。

#### ■ 道具や補助具の工夫

- ・ 道具や補助具などを工夫して、どの児童・生徒も、「今できること」を生かして学習に取り組むことができる環境を準備します。

#### ■ 活動量の確保

- ・ どの児童・生徒も時間いっぱい活動できるよう、十分な活動量を用意します。

#### ■ 繰り返しの確保

- ・ 技能の習熟・獲得を図ることができるよう、「活動の繰り返し」を豊富に用意します。

### 授業チェックをしてみましょう。

- 一人一人が「できること」を生かした活動を用意していますか。
- 知識・技能を教えることが目的の授業になっていませんか。
- 教師の指示が多い授業になっていませんか。
- 補助具を工夫し、児童・生徒が「一人でできる」環境を整えていますか。
- 児童・生徒の十分な活動(量)を用意していますか。
- テーマに沿った様々な活動を用意していますか。
- 繰り返しの活動が用意されていますか。
- 児童一人一人の意欲を引き出す支援の工夫がありますか。





## 次のような授業は改善が必要です！

### ◆ スキルの獲得が主たるねらいになっている授業

- 「買い物ができるようになる」、「(道具の)操作ができるようになる」、「(調理の)手順を覚える」、「歩行能力を高める」といったスキルの獲得に関する内容は、「各教科等を合わせた指導」における各単元(授業)のねらいとしては不適切です。  
「各教科等を合わせた指導」のねらいは、主体性や積極性といった意欲・態度の育成にあります。これを踏まえ、単元ごとの主たる活動に基づく授業のねらいを設定する必要があります。

### ◆ 教員の指示が多い授業

- 教員の指示が多い授業は、児童・生徒が「一人でできる」、「夢中で取り組む」学習環境が整えられていないことを証明するものです。中でも、「～してはいけません」といった制止の指示が多い授業は、児童・生徒にとっても教員にとっても、ストレスが溜まる授業になります。  
スキルの獲得を主たるねらいとした授業は、教員の指示が多くなる傾向があります。「できる状況づくり」を進め、最小限の必要な指示で、児童・生徒が主体的に活動できる学習環境を整え、教員もともに活動できるようにする必要があります。

### ◆ 教員が、常に児童・生徒の横で介助している授業

- 例えば、調理活動の際に、児童・生徒一人一人の技能を考慮することなく、市販の調理道具をそのまま使用しているような授業です。児童・生徒は道具の操作が難しいため、常に教員が付き添って介助を行うこととなります。  
常に教員が横にいる授業では、児童・生徒は「一人でできた」という満足感や達成感を味わうことはできません。スキルの獲得を主たるねらいとした授業は、教員の介助が多くなる傾向があります。  
手順・工程の分析や、補助具の開発、手順表等の視覚支援の工夫などにより、「一人でできる状況」を整える必要があります。

### ◆ 児童・生徒の「待ち時間」が多い授業

- 「次は〇〇君の番です」のように、児童・生徒が順番で活動する授業で、特別支援学校ではよく見かける授業の実施形態です。しかし、よく観察していると、児童・生徒一人一人にとっては、活動時間よりも待っている時間のほうが長かった、といった授業もあります。  
「各教科を合わせた指導」においては、児童・生徒一人一人が存分に活動できるよう、十分な学習活動(量)を用意する必要があります。十分な活動(量)がなければ、学習に夢中で取り組むことはできません。

### ◆ 「導入」と「まとめ」が長い授業

- 出欠席の確認、本時の内容の説明、個別目標の確認などの「導入」や、日誌の記入、児童・生徒による本時の反省や教員による個別評価などの「まとめ」に、長い時間がかかる授業があります。2単位時間続きの授業なのに、「導入」と「まとめ」で1単位時間程度を要している授業もあります。  
授業全体の時間配分や学習内容を再検討する必要があります。「導入」や「まとめ」においても、児童・生徒が主体的に活動できる環境を整える必要があります。